

同窓生が語る宮澤賢治

小野寺伊勢之助教授と宮澤賢治（5）

若尾紀夫（C昭39・院41）

下の写真は小野寺伊勢之助教授に宮澤賢治の遺言により贈られた「国譯妙法蓮華經」と贈呈書き（昭和9年6月6日、天第五拾貳号）である。賢治は昭和8年9月21日に37歳という短い生涯を駆け抜けた。彼は臨終にあたり自分の信仰する法蓮華經一千部を印刷して知人友人に贈るように家族に遺言した。小野寺伊勢之助教授への贈呈書きには、賢治の遺言文と弟宮澤清六氏の挨拶文が載せられている。

合掌

私の全生涯の仕事は此經をあなたの御手許に届け
そして其中にある佛意に觸れてあなたが無上道に
入られん事を御願ひするの外ありません

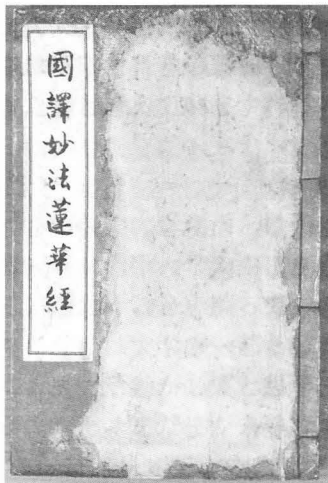
昭和八年九月二十一日

臨終の日に於て

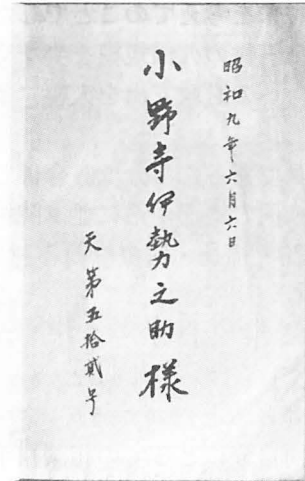
宮澤賢治

以上は兄の全生涯中最大の希望であり又私共に依
託せられた最重要の任務でありますので今刊行に
当たりて謹んで兄の意志によりて尊下に呈上致
します

宮沢清六



小野寺伊勢之助教授へ贈られた
「国譯妙法蓮華經」



贈呈書き

ではなぜ小野寺伊勢之助教授に「国譯妙法蓮華經」が贈られたのか。教授と賢治との関係はどのようなものであったのか。小野寺伊勢之助教授は盛岡高等農林学校農学科の5回生（明治40年入学）で賢治の先輩であり、大正14年に盛岡高農に赴任し昭和20年に退職するまで肥料学や分析化学などを教え、また実に多彩多数の研究を行った。賢治は昭和8年9月に亡くなったので、二人が重なる期間は、大正14年から昭和8年までの僅か8年間に過ぎない。時期としては賢治の羅須地人協会時代と東北碎石工場技師時代に相当する。その間に二人の間には何があったのか意外に知られていない。

本稿では、最初に盛岡高農農学科及び農芸化学科肥料学教授陣、その一人である小野寺伊勢之助教授の略歴や研究業績、特に賢治との接点と考えられる研究について、次に二人の具体的な交流について書簡などを通して述べよう。

農学科及び農芸化学科肥料学教室の教授達

盛岡高農創立時（明治35年）には、農学科は農学・林学・獣医学の3学科で構成されていたが、明治42年5月に事務規定を改定して2部制となり第1部と

第2部に分けられ、関豊太郎教授が農学科第2部長に就任した。大正2年4月には、学則改正で農学科第1部と第2部に分離して農芸化学科の母体が誕生、さらに大正6年12月には農学科第1部が農学科に、農学科第2部が農芸化学科に改められた。賢治は大正4年、農学科第2部に入学した。

農学科及び後の農芸化学科においては、農業の土台となる地質・土壌・肥料は重要な分野であり、授業科目の中でも大きな比重を占めていた。そのため創立当初からその分野の優秀な教授陣が招聘された。地質及土壌分野では、賢治に大きな影響を与えた関豊太郎教授（地質及土壌学教室初代、明治38年～大正9年）、肥料分野では吉村清尚教授（肥料学教室初代、明治38年～45年）である。ここでは、後者の肥料学分野の教授陣について時系列的に述べよう。

佐藤義長教授

開校当初は、後に第2代校長（明治42年～大正10年）となる佐藤義長教授（明治36年3月11日赴任）が化学・肥料を講義したが、明治37年12月6日、農芸化学・農産製造研究のため仏独に3年間留学した。それを受けて吉村清尚教授が明治38年3月に着任し、肥料・農産製造を担当することになる。

恒藤規隆講師

明治18年わが国で初めて甲斐国土性調査を行い、それ以来日本各地の土性調査に従事して数多くの土性図を作成した。明治32年3月、わが国で最初の農学博士号が授与され、「日本土壌論」（明治37年）や「実用肥料行話」（明治40年）などを執筆した。明治37年10月31日、盛岡高農講師嘱託として就任し、大正13年まで勤務した。土壌・肥料を講義したが、主要な担当科目は実用的肥料製造で、特にリン酸肥料製造法を中心としたものであった。

吉村清尚教授

明治38年3月27日、盛岡高農講師嘱託となり、化学及分析・肥料・農産製造を担当、同年5月20日には教授に昇任する。明治42年3月6日、伊独米3ヶ年の留学に出発し、明治45年3月に帰国したが、その年の5月29日付けで鹿児島高等農林学校へ転出した。吉村教授は、教科書など多数の著書、例えば農用化学分析（有隣堂、明治42年）、最新肥料学（有隣堂、明治43年）、新編肥料学全書（有隣堂、大正2年）、肥料学教科書（弘道館、大正4年）、最新肥料学教科書（弘道館、大正4年）、最新肥料学講義（弘道館、大正10）、最新肥料学全書（弘道館、大正11）を執筆している。

大杉 繁教授

明治42年8月31日、盛岡高農肥料学教室の講師嘱託となり土壌・肥料を担当、明治44年9月25日、教授に昇任する。大正3年10月22日、退職（依願免本官）し、大原農業研究所化学部長（大正3年～大正12年）を経て京都帝国大学農学部教授となる。大正・昭和時代の著名な土壌学者で、酸性土壌の研究で有名である。一般土壌学（朝倉書店、昭和18年）、土壌学概論（朝倉書店、昭和25年）など多数の著書を著した。吉村清尚教授は明治42年から明治45年まで、関豊太郎教授は明治43年から大正2年まで海外留学中であったため、土壌・肥料を専門とする大杉教授が採用されたのであろう。農学科5回生の小野寺伊勢之助は、在学中に大杉教授から直接研究指導を受けた。このことは後の小野寺伊勢之助の研究に大きな影響を与えたと考えられる。

古川仲右衛門教授

大杉 繁教授の退職後、大正3年10月、古川仲右衛門が教授として赴任し、土壌及肥料・化学・同実験・農学大意を担当した。賢治の得業論文の作成は古川教授と関豊太郎教授との共同指導で行われた。病気で休職中の古川教授は、大正10年7月18日に退職（休職満期）することになる。

上杉綱雄教授

古川教授が病気休職のため、大正8年8月13日、上杉綱雄教授が赴任し、その後、大正11年6月23日には動植物生理化学研究のため2年間、英独仏へ留学したが、帰国直後の大正13年9月20日に病死した。

飯島市郎助教授

大正10年11月14日、農学科第2部2回生の飯島市郎が助教授として赴任、気象・化学・分析化学を担当したが、大正12年8月28日以降は、肥料学・気象を講義した。大正14年6月15日に病気のため退職（依願免本官）した。

小野寺伊勢之助教授

古川教授・上杉教授・飯島助教授が相次いで退職あるいは病死したため肥料学教室の教授が空席になった。そのために、大正14年6月23日付けで小野寺伊勢之助が講師嘱託として着任し、昭和20年9月21日まで在職した。小野寺教授については、項を改めて詳しく述べることにする。

千葉春雄教授・大矢富二郎教授

小野寺教授の後任として、千葉春雄教授（昭和20

年7月30日～昭和43年4月1日)、さらに大矢富二郎教授(昭和20年10月31日～昭和50年4月1日)が肥料学を担当した。

小野寺伊勢之助教授の略歴

小野寺伊勢之助は、明治21年2月24日、岩手県西磐井郡中里村(現一関市中里)で誕生した。明治33年4月に岩手県立一関中学に入学、明治38年3月、同校を卒業(4回生)した。その後、明治40年4月、盛岡高等農林学校農学科に入学(5回生)、学業優秀により2年生と3年生の時には特待生扱いとなり、明治43年3月28日に卒業した。明治43年5月2日、研究科(農芸化学)に入学、大正2年3月27日に同研究科を修了した。

研究科を修了した小野寺は、大正3年4月24日、ドイツのケーニヒスベルク大学及びイギリスのケンブリッジ農科大学に留学した。当初ドイツに滞在し勉強していたが、大正3年7月に第1次世界大戦が勃発したため、急遽ロンドンに避難しケンブリッジ農科大学で研究を続けた。ロンドンに避難した時の写真「避難記念(倫敦)」と記事「乱渦を避けて: 在英農学得業士・小野寺伊勢之助」が校友会報26号(大正3年12月16日発行)にみられる。写真は、ロンドンで偶然に一緒になった(右)小野寺伊勢之助(A明治43)、(中)山田玄太郎教授(植物病理学教室)、(左)土居禎夫(F明治45)のスリーショットである。



盛岡高農農学科
第3学年
(明治42年)



盛岡高農教授時代
(昭和4年)

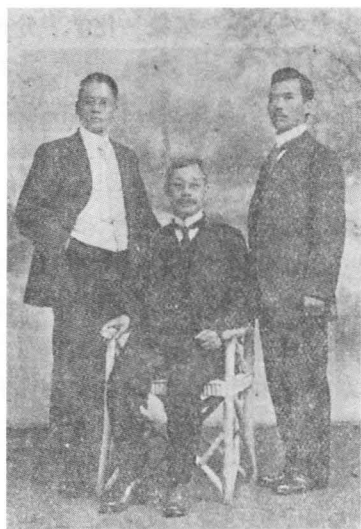
帰国(大正4年2月11日)後、大正4年から9年まで大原農業研究所(現岡山大学農業生物科学研究所の前身)に在職した。同研究所は大原孫三郎により農業の科学的研究と農業改良を目的として設立(大正3年7月2日)されたもので、盛岡高農の大杉 繁教授(農学士)は、研究所設立当初に化学部長として赴任し、また盛岡高農時代に大杉教授の指導を受けた小野寺伊勢之助(農学得業士)も、同化学部に勤務した。

その後、大正9年から13年まで丸見屋商店に就職し、台湾のミツワ嘉義農場及び朝鮮のミツワ浦項農場で農業技師として勤務した。

小野寺伊勢之助は、大正14年6月23日、盛岡高等農林学校の講師嘱託として赴任し、肥料学を担当した。昭和3年7月9日付けで農学博士の学位「紫雲英の土壤中に於ける分解及其稲作に及ぼす影響(東京帝国大学)」を受領、同年9月1日には講師から教授(肥料学教室)に昇格する。当時の教授達は多くの講義を受け持っていたが、小野寺教授の昭和3年の担当科目をみると、肥料学、化学及分析化学、分析化学実験、工業化学、特殊化学実験、気象学、農学汎論、独逸語である。昭和17年頃、不幸にして脳腫瘍となり失明し手術を受けたが経過が思わしくなく病気休職扱いであったが、昭和20年9月に満期退職した。その後は、郷里一関市に戻り、昭和28年9月21日に66歳の生涯を閉じた。

小野寺伊勢之助教授の研究業績

小野寺伊勢之助の農学科在籍中の研究については、得業論文などの研究資料が残っていないので詳細は不明であるが、鈴木梅太郎博士及び大杉 繁教授の指導でアミノ酸定量法を研究し、農学得業士・小野寺伊勢之助の名前で「アミノ酸定量法としての亜硝酸法及醤油中のアミノ酸に就て」(盛岡高農校友会報16号・明治45年)を発表している。更に同校友会報27号(大正4年)では「酸性土壌に関する研究(大正2年の日付)」を発表し、指導を受けた大杉 繁教授に謝辞を述べている。このことから、小野寺伊勢之助は当時から酸性土壌に関心をもっていたと思われる。ちなみに大杉 繁教授は、「三方ヶ原土壌改良に就て(大正元年)」、「酸性土壌の原因に関する研究(大正2年)」、「酸性土壌の酸性に就て(大



避難記念(倫敦)

正3年)」を公表しているのです、その影響は看過できない。

小野寺伊勢之助は、論文「酸性土壌に関する研究」の冒頭で酸性土壌の改良に言及している。「元来土壌は中性反応を呈し植生に対し十分な栄養機能を保持することが望まれるが、実際には絶対の中性はあり得ない。しかし特殊な土壌を除いて酸性土壌でも抵抗性のある植物は少なくなく、わが国の米作地の大半は酸性土壌である。三方ヶ原のように広大な原野は強い酸性を呈し作物は繁茂せず放置されているので、これを開発利用することは今日の急務である。」このように小野寺伊勢之助の研究の原点は「酸性土壌の改良」にあり、そのために土壌酸性の原因及び性質の解明を目指したものである。さらに土壌改良に必要な中和石灰施用量を算出するためには、土壌酸度を正確に測定することが重要であると指摘している。石灰による酸性土壌改良の研究、そこには関豊太郎教授や宮澤賢治の考えに共通する問題意識があったものと思われる。

小野寺伊勢之助教授の研究は多岐にわたるが、千葉 明氏（肥料科学29号）によると、次のように大別される。1) 有機酸に関する研究、2) 紫雲英（レンゲソウ）に関する研究、3) 土壌成分の分析法に関する研究、4) 砒素・銅など微量成分の農作物に対する影響の研究、5) 肥料としての硫酸塩及び塩化物に就ての研究、6) みみずと土壌に関する研究、7) 珪酸の植物生育に及ぼす影響の研究、8) 大豆粕及び厩肥に関する研究、9) 冷害に関する調査研究、10) 東北の冷害対策、11) 著書。本稿では、賢治と関連すると思われる初期の研究1)と2)、著書11)を取り上げる。

小野寺伊勢之助は「圃場土壌の酸性の原因は、生理的酸性肥料（人造肥料）の濫用による無機酸の生成と有機質肥料の施用による有機酸の生成であるが、特に後者が重要である。」との考えで、土壌中における有機質肥料の分解と有機酸の生成について研究を行った。欧州留学中、さらに帰国後の大原農業研究所では、有機質肥料の分解で生成される有機酸類の分別定量法、pH（水素イオン H^+ 濃度）の電気的測定法、多様な試験植物に対するさまざまな有機酸類の刺激作用や有害作用などについて多くの研究を行った。また米糠、大豆粕、紫雲英などの有機質肥料を実際に水田土壌に施用したときに生成する有機酸類の定量についても検討している。

- ・植物に対する各種酸類の刺激及び有害作用に就て：農学会報155号（大正4年）
- ・植物の酸に対する影響に就て：農学会報167号（大正5年）

- ・醋酸・蟻酸及乳酸の分離定量法に就て：農学会報173号（大正6年）
- ・醋酸・蟻酸及乳酸の分離定量法に就て：農学会報176号（大正6年）
- ・有機質肥料の分解に際し生成する有機酸に就て：農学会報190号（大正7年）

このような一連の研究を背景に、次の水田土壌における紫雲英の研究へと発展することになる。

紫雲英（レンゲソウ）に関する研究

研究業績について

小野寺伊勢之助は、大原農業研究所及び丸見屋商店時代に有機質肥料として紫雲英を取り上げて詳細な研究を行い、その成果を農学会報（大正7～10年）及び日本土壌肥料学雑誌（昭和4年）に報告している。大正14年に盛岡高農に赴任した小野寺伊勢之助教授は、それまでの研究成果を学位論文「紫雲英の土壌中に於ける分解及其稲作に及ぼす影響」として集大成した。

- ・紫雲英及大豆粕の水稲生育に及ぼす影響：農学会報191号（大正7年）
- ・紫雲英の水稲生育に及ぼす有害作用の原因に関する研究（予報）：農学会報205号（大正8年）
- ・紫雲英の水稲生育に及ぼす有害作用の原因に関する研究（第1報）紫雲英分解の際に生ずる有機酸の塩類に依るや：農学会報197号（大正8年）
- ・同上（第2報）紫雲英分解の際に生ずる瓦斯体に就て：農学会報215号（大正9年）
- ・同上（第3報）紫雲英分解の際に生ずる瓦斯体の水稲生育に及ぼす影響：農学会報225号（大正10年）
- ・紫雲英に依る水稲生育に及ぼす有害作用の改良試験：農学会報226号（大正10年）
- ・紫雲英の土壌中に於ける分解及び其稲作に及ぼす影響：盛岡高等農林学校同窓会報22号（昭和3年）
- ・紫雲英の土壌中に於ける分解及其稲作に及ぼす影響（一）：日本土壌肥料学雑誌3巻2号（昭和4年）
- ・紫雲英の土壌中に於ける分解及其稲作に及ぼす影響（二）：日本土壌肥料学雑誌3巻3号（昭和4年）
- ・紫雲英の土壌中に於ける分解及び其稲作に及ぼす影響：盛岡高等農林学校学術報告13号（昭和4年）

紫雲英（*Astragalus sinicus*）について

紫雲英とはどのような植物か簡単に説明しよう。「紫雲英」は紅紫色の花が雲のように一面に咲く様

子から付けられた漢名で、レンゲソウとかゲンゲと呼ばれる。花巻地方ではハナコと呼ぶことが多い。かつて日本の春の風物詩であったレンゲソウ畑は、現在では殆ど見られなくなった。

紫雲英はマメ科植物に属する越年生1年草で、日本・中国・朝鮮などの山野に自生する。その根の部分に大小の根粒（瘤）が形成され、その中に棲息する根粒バクテリア（*Rhizobium*）によって空気中の窒素ガス N_2 が細菌細胞内に取り込まれ有機化合物（アミノ酸などの含窒素化合物）が合成される。紫雲英はかつてはわが国の主要な緑肥作物（窒素肥料）で、北海道を除く各地で主に水田において栽培され、緑肥生産額の約77%（大正14年度）、栽培面積は全国水田の約9%（昭和3年）を占めていたといわれる。水田の緑肥とする際には、地域や気候によって異なるが、秋の彼岸前後に播種し翌春の開花直前に収穫する。地上部の茎葉を刈り取り緑肥として用いることもあるが、水田の場合、春先水田を耕すときに紫雲英の茎葉と根全体を土壤に直接鋤き込み緑肥とすることが多い。

小野寺伊勢之助の紫雲英に関する研究は、わが国における先駆的なものである。研究課題としてなぜ紫雲英を取り上げたのか。その経緯については既に一部触れたが、彼自身の言葉を借りると次のような発想である。「凡そ現代に於て最も低廉な窒素肥料は緑肥であり、紫雲英はその窒素肥料として主に我が国主要な作物である水稲に用いられている。著者は水田に紫雲英を多量に施した場合、土質により水稲生育に悪影響を及ぼすことを実験で確かめた。それは、稲作上極めて重要なことであると考え、紫雲英の水田状態に於ける分解に就て研究を行い、且つ紫雲英の分解物が水稲生育に及ぼす影響及びその悪影響を除外する試験を行った。」

研究結果の概要は次のようになる。1) 紫雲英が土壤中で分解する時に水稲に対して有害作用が見られることがあるが、その原因は遊離有機酸によるものではない。2) 紫雲英の分解に伴い水稲生育に影響するさまざまな物質（亜酸化鉄、硫化物、膠状鉄、各種ガス）が生成する。3) 各種ガスの発生は重要である。その中でも多量に発生するものはメタンガス CH_4 と炭酸ガス CO_2 で、その他に窒素 N_2 と少量の水素 H_2 が生成する。そのガス組成は、土壤層位、土性、紫雲英の施用量、土壤pH、温度、酸素の供給、土壤の乾燥などにより大きく変動する。4) 紫雲英を多量に与えると水稲生育が阻害されることがあるが、その主要因は紫雲英の異常発酵で発生するメタンガスと炭酸ガスの有害作用、及び土壤中の酸素欠乏（還元状態）である。5) 紫雲英の施用による有

害作用の除去には生石灰の添加が有効であるが、排水して土壤を乾燥すること（酸素が供給された酸化状態）が最も効果的である。

このように小野寺伊勢之助は、紫雲英を緑肥として水田に施用したときに起こるさまざまな問題を新しい視点や解析技法で詳細に検討している。例えば、土壤中に有機質肥料を施用するときに生成する有機酸類の分別定量法の確立、水田状態のpH（水素イオン濃度）の電気的方法による測定、水田土壤中紫雲英の分解によって生成する各種ガス（組成）の定量分析、紫雲英分解による各種ガスの発生と諸条件（温度、施用量、pH、酸素供給、乾燥など）との関連性についての検討などは、小野寺伊勢之助の優れた研究である。

現在では、植物などの有機物の嫌氣的分解メカニズムについてはかなり解っている。有機物は、酸素が存在する好氣的（酸化的）環境では好気性細菌によって完全酸化されて最終的には水と炭酸ガスになる。ところが湛水された水田土壤のように酸素供給が遮断された嫌氣的（還元的）環境における有機物の分解反応は、多種類の通性嫌気性細菌群や偏性嫌気性細菌群が関与する極めて複雑でダイナミックなものである。水田土壤に投入された有機物は、先ず酸生成菌によって加水分解され酢酸・酪酸・プロピオン酸などになり、また水素ガスと炭酸ガスが生成される。酢酸以外の有機酸は水素生産性酢酸生産菌によって酢酸と水素ガスに分解される。最終的には、酢酸は酢酸分解メタン生成菌によって、水素ガスは水素利用メタン生成菌によってメタンガスと炭酸ガスへと変換される。このようなメタン発酵の他には、嫌氣的環境で起こる硫酸還元反応も重要であり、硫酸塩 SO_4^{2-} は偏性嫌気性硫酸還元菌によって硫化水素 H_2S に還元される。有機物や硫酸塩が多い水田では、大量の硫化水素が発生して水稲生育が阻害されることがある。

明治・大正時代には、有機物の嫌氣的分解過程とそれに関与する多種多様な細菌の存在や生態学的役割については未だよく解っていなかった。しかし小野寺伊勢之助が行った土壤中における紫雲英などの有機物分解の研究は、現在の知識からみても現象や問題点を的確に把握し解析している。

小野寺伊勢之助教授の著書

小野寺伊勢之助は、その生涯においてさまざまな分野の研究を精力的に行ったが、同時に数多くの肥料土壤学関係の著書を執筆している。著書は大きく2種類に分けられる。一つは大学生や研究者・農業

技術者などを対象にした学術的専門書、もう一つは農業学校用教科書である。

昭和4年から7年にかけては、多くの研究論文を書きながら4冊の著書を刊行している。研究論文は勿論、著書においても、膨大な国内外の文献（情報）を収集している。情報技術（IT）や情報サービスが進歩した現在では、世界の情報を入手することは容易であるが、当時国内外の情報を入手するためには大変な労力と時間が必要であったはずである。先駆的な研究を進め同時に著書を著すために、小野寺伊勢之助教授は国内外の膨大な最新情報の収集に努めたと思われる。そこには教授の研究者及び教育者としての妥協を許さない真摯な姿がみられる。

学術的専門書は全て養賢堂から出版されている。肥料学汎論は「長い間行ってきた自分の研究成績を学生の学修に役立てるため、また関係する専門家諸氏の参考になればとの思いで執筆した。」と述べている。昭和7年刊行の肥料学各論（上下）は肥料学汎論の姉妹編で総頁数1,300の大書で、各論中動植物質に属する肥料について詳細に執筆した実用書である。これは当時の肥料学分野の研究者や教育者にとっては座右の書であったといわれ、昭和17年には第5版を刊行している。その中の植物質肥料の項では、紫雲英を含む緑肥について自分の研究成果も取り入れ200頁を割いて記述している。

- ・肥料学汎論：養賢堂（昭和5年11月5日）
- ・肥料学各論上：養賢堂（昭和7年2月5日）
- ・肥料学各論下：養賢堂（昭和7年12月5日）
- ・肥料学綱要：養賢堂（昭和16年4月30日）
- ・改著肥料学新編：養賢堂（昭和26年1月20日）

農業学校用教科書としては、4冊が光原社から刊行されている。土壌学、肥料学教科書（B）、実用土壌肥料学は盛岡の光原社に保存されているが、最初に出版された肥料学教科書（昭和7年2月）は版元にもみあたらない。この肥料学教科書の出版は、賢治が光原社の及川四郎に宛てた葉書（408a）及び東北砕石工場の鈴木東蔵に宛てた封書（409）に記載されているが、実物が確認されていない幻の本である。

- ・肥料学教科書：光原社（昭和7年2月5日）
- ・土壌学：光原社（昭和12年1月10日）
- ・肥料学教科書（B）：光原社（昭和12年1月10日）
- ・実用土壌肥料学：光原社（昭和13年1月25日）

小野寺伊勢之助教授はなぜこれらの教科書を光原社から刊行するようになったのか。ここでは小野寺伊勢之助教授と光原社（及川四郎・近森善一・宮澤

賢治）について触れよう。

光原社 及川四郎と近森善一と宮澤賢治

材木町は、盛岡駅近くを流れる北上川沿いにある歴史の古い商店街で、ここから盛岡高等農林学校（現岩手大学農学部）は間近である。当時は、盛岡駅から夕顔瀬橋あるいは開運橋を渡り材木町を通って盛岡高農に行った。その材木町の大通りは、今では「いーはとーぶアベニュー」と名付けられ、賢治座像や星座などの賢治童話にまつわるさまざまなモニュメントが飾られている。その通りの入口に近い賢治座像の先に光原社がある。

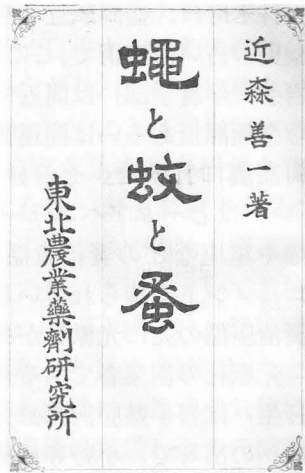
光原社の創業者である及川四郎（明治29年9月8日生）は岩手県胆沢郡姉体村（現奥州市水沢区姉体町）の出身で、小野寺伊勢之助と同様に一関中学校卒業後、大正5年4月10日、盛岡高農農学科第1部に入学し作物・園芸を専攻、大正8年3月19日に同学科を卒業（14回生）した。このように及川四郎は、中学校から盛岡高農まで小野寺伊勢之助と同じ経歴をたどる。盛岡高農卒業後は、大正10年に岩手県立農事試験場胆江分場の産業技師として勤務したが、一年で退職して盛岡に戻っていた。

近森善一（明治30年8月25日生）は高知県香美郡富家村（現香南市野市町）の出身で、及川四郎と同じく盛岡高農農学科第1部（作物・園芸専攻）を卒業（14回生）した。近森善一は1年2学期（大正5年7月）に自啓寮の北寮9号室に入るが、その時の室長が農学科第2部2年の宮澤賢治であった。その当時、近森善一は賢治について鉱物採集や地質調査によく出かけたといわれる。引き続き、大正8年4月2日、研究生（研究科目：昆虫学）となり、大正10年1月31日に修了した。研究生の時、大正9年9月14日、岩手県立盛岡中学校教師嘱託となり、大正11年1月31日には同盛岡中学校教諭となるが、大正11年4月3日、長崎県立農学校（現長崎県立諫早農業高等学校）に転任した。その後、短期間（大正12年2月26日～5月9日）ではあるが、盛岡高農農学科の動物学実験室助手（動物学及昆虫学分野の門前弘多教授）として勤務していた。

このように及川四郎と近森善一は盛岡高農の同窓生で親友の間柄であり、また一年先輩の賢治とも親しい友人関係であった。賢治没後は、兩人にも「国譯妙法蓮華經」が贈呈された。

及川四郎と近森善一は、大正12年頃、盛岡市厨川館坂に「東北農業薬剤研究所」を立ち上げ、農業用薬剤の製造・販売や農学校用教科書などの出版の仕事をはじめた。その当時の出版物としては、近森善一

著「蠅と蚊と蚤」（書名は賢治の発案という）（大正12年2月10日）、同著「病虫害防除便覧」（大正12年7月5日）、小熊彦三郎著「果樹園芸教科書」（大正13年2月20日）、同著「蔬菜園芸教科書」（大正13年2月20日）、同著「除虫菊の栽培」（大正13年8月20日）、同著「花卉園芸学教科書」（大正14年9月23日）などがある。発行発売元は、東北農業薬剂研究所出版部から杜陵出版部に、さらに光原社「盛岡光原社（本店）・東京光原社（支店）」へと変わるが、杜陵出版部と光原社は賢治が名付けたといわれる。



近森善一著
「蠅と蚊と蚤」

宮澤賢治が生前に出版した唯一の童話集「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」は、杜陵出版部と東京光原社を発売元として出版（大正13年12月1日）され、発行人は近森善一となっている。近森善一は教科書を販売する目的で花巻農学校教師をしていた賢治を訪ねたが、その際賢治が書いた童話を出版する意向を知らされ、その原稿を盛岡に持ち帰った。近森善一と及川四郎は、その童話の刊行を即決して賢治とも話し合い、「注文の多い料理店」を書名、「東京光原社」を社名としたといわれる。ところが、大正13年12月、近森善一は生家の事情で高知に帰郷したため、その後は及川四郎が杜陵出版部（光原社）を引き継ぐことになり、現在の光原社へと歴史が繋がっている。

小野寺伊勢之助が肥料学教室古川仲右衛門教授の後任として赴任した時期（大正14年6月）は、丁度そのような状況であった。宮澤賢治と及川四郎は、それまでは盛岡高農の大先輩である小野寺伊勢之助とは直接面識はなかったが、盛岡着任後の早い時期に後任の小野寺伊勢之助教授を訪問したことは想像に難くない。やがて羅須地人協会協会・東北砕石工場技師時代に、賢治は小野寺伊勢之助教授の研究に関心を持ち肥料学教室に足を運ぶようになり、光原社の及川四郎は小野寺伊勢之助教授の農業学校用教科書の出版を手掛けることになる。

今回は主に小野寺伊勢之助教授と賢治との関わりについて、書簡などに基づき詳しく述べたい。

本稿をまとめるに当たり千葉 明氏（元岩手県立農業試験場長）から多くの助言を頂きました資料を参

考にさせて頂いた。ここに謝意を表します。

参考資料

- ・大日本甲斐国土性図：恒藤規隆・大内 健・マキス/フェスカ、農商務省地質調査所（明治18年）
- ・アミノ酸定量法としての亜硝酸法及醤油中のアミノ酸に就て：農学得業士・小野寺伊勢之助、盛岡高等農林学校校友会報16号（明治45年）
- ・三方ヶ原土壌改良に就て：大杉 繁・新井高次・佐藤覚一、農学会報121号（大正元年）
- ・酸性土壌の原因に関する研究：大杉 繁、農学会報131号（大正2年）
- ・酸性土壌の酸性に就て：大杉 繁、盛岡高等農林学校校友会報23号（大正3年）
- ・乱渦を避けて：在英農学得業士・小野寺伊勢之助、盛岡高等農林学校校友会報26号（大正3年）
- ・酸性土壌に関する研究：農学得業士・小野寺伊勢之助、盛岡高等農林学校校友会報27号（大正4年）
- ・紫雲英の土壌中に於ける分解及び其稲作に及ぼす影響：小野寺伊勢之助、盛岡高等農林学校同窓会報22号（昭和3年）
- ・紫雲英の土壌中に於ける分解及び其稲作に及ぼす影響：小野寺伊勢之助、盛岡高等農林学校学術報告13号（昭和4年）
- ・年譜 宮澤賢治伝：堀尾青史、図書新聞双書（昭和41年）
- ・大原孫三郎伝：大原孫三郎伝刊行会（昭和58年）
- ・年譜 宮澤賢治伝：堀尾青史、中央文庫（平成3年）
- ・石っ子賢さんと盛岡高等農林：井上克弘、地方公論社（平成4年）
- ・新校本宮澤賢治全集 12、15巻：筑摩書房（平成7年）
- ・新校本宮澤賢治全集 16巻（下）：筑摩書房（平成13年）
- ・小野寺伊勢之助博士の肥料学研究と周辺の人々：千葉 明、肥料科学29号（平成19）
- ・パンフレット「注文の多い料理店」出版事情：光原社